

レースっていいよね
第51回 「それで良いのか、若人よ」の巻

私が工場1Fで作業をしていた時の話だ。

ふと気が付くと、背後に21～22歳くらいの若者が黙って立っていた。
顔見知りならともかく、初対面でしかも、勝手に工場内に入ってくるのもどうかとは思いますが、その目的を誰にも告げずに何故黙って立っているのか、そのほうが私には理解できない。

更に驚いたことに、「何かご用ですか？」と声を掛けると彼は、やっと口を開いた。
「あの～、FJのタイヤ・・・」

これだけを発したである。おいおい、確かに最近は言葉を略す傾向にはあるけれど、遂に名詞のみで会話するようになったのか？ それにしても初対面なら、せめて自分がどうゆう者で、どのような目的でやって来たのかくらいは相手に伝えるものだ。

義務教育ではこういった基本的なことさえ、ゆとり教育の名の元に教えなくなったのだろうか？

それはともかく、この話だけならチョットしたオヤジのぼやきに終始するのだが、この問題は実際にはもっと深刻で、重要な内容を秘めている。なぜならばタイヤを求めた彼は、レースという舞台に足を踏み込んでいるからである。

レースというスポーツは特殊性をもつ、という話は数度述べてきた。
つまりレースとは、マラソンや体操などの様に、競技に参加する当人のみの能力だけで推し量れない多種多様なファクターが絡み合う、複雑な競技なのである。

レースに出場し、あまつさえ結果を残そうと考えるなら、ドライバーの能力は勿論の事、それを支える相当な人数の援助があって初めてスムーズに戦える、というものだ。
エンジニアやメカニックだけではない。時にはオフィシャルにしてもそうだし、もしスポンサーがあるのなら後援者、そして無償で応援してくれるファンなどのチカラは大きなものである。

つまり、ドライバーは「クルマの運転能力」という基本的な技術を常に磨くことは勿論、自分自身を上手くアピールできる「コミュニケーション能力」をも持ち合わせなくてはならないのだ。
もしこのコミュニケーション能力が欠如しているなら、そのドライバーにはレーサーとしての未来は無いと断言できる。厳しいが、これは現実だ。

俺はスポンサーなんか持ってないから関係無い・・・。
別に、底辺カテゴリーに参戦してるだけだから・・・。

こういうドライバーもいるだろう。
しかし上を目指すのなら、どのようなカテゴリーであろうとも、常に自分自身を磨く必要があるのだし、それに、「レース」で戦うという内容は、上だろうが下だろうが、そのプロセスは全く同じである。
仮にそれがエフワンであったにせよ、だ。

逆説的にいうなら、底辺カテゴリーからきちんと「コミュニケーション能力」を研ぎ澄ませば、ステップアップしたとしても、与えられたチャンスをより有意義に活かすことが出来る。
ひいては、それは勝利への最短コースであるとも言え換えられるのだ。

かといって、口下手なのに必要以上に喋ったり、ましてやお世辞を言う必要など無い。

重要なのは、自分の感情や思考をいかに的確に、簡潔に「他人」に伝えられるかということである。またあえて言うなら、時には素直であることも重要である。

レースに参加する上で(いや、実際はレースに限らず生きていく上でもそうなのではあるが・・・)味方は一人でも多い方が良いに決まっている。特に、今や若い世代、レースによっては10代のレーサーが活躍する世界でもある。

レーサーだから運転だけしていれば良い、そんな甘い世界ではない。若いだけのレーサーなら星の数ほどいるのだ。気が付けばいつの間にか周囲に埋没していたというのはよくある話だ。

彼はそのことに気付いているのだろうか。もっとも、余計なお世話である。彼が速かろうが遅かろうが、今のところ私には何の関わりもないこと。能力のあるものは自然と生き残っていくものなのだから。

